

「光」という文字は火と人を組み合わせて出来たと言われている。火というのは人類の進化に無くてはならない神聖なものであり、火があることで寒さから身を守り、多くのものを可食化し、あらゆる道具を製造・加工することが可能になってきた。それは正に神からの授かり物であり、世界最古の宗教と呼ばれるゾロアスター教では火が善の象徴として尊ばれ、神殿内ではオリピックの聖火の如く火を絶え間なく燃やし続け、信者はひたすら火を捧ぎ続けていた。

その火を奉り、頭上に掲げている様子を形にしたのが「光」。つまり、ただ明るさを指すだけの言葉では無く、火に対する人々の崇拜の気持ちが込められている。それ故、光には神・未来・勝利や希望などの象徴として、多く使われている。

今、この混沌とした状況の中で、我々はどこに向かうのだろうか。もしかするともう二度と以前のように戻れないのかも知れない。果たしてそれは進化なのか、そうではないのか。しかし、そのような中だからこそ、この先の道を照らしてくれる光を心のどこかで探しているように感じる。

冬の日照時間が7時間ほどしか無い北欧・ロシアの人々にとって、光(太陽)というのはきっと我々が感じる以上に特別な意味を持っていたのでは無いかと思う。太陽神といえバギリシャ神話のアポロンやヘリオス、エジプト神話のラーやアメンの様に男神のイメージが強いが、北欧神話では女神(ソール)となっているのも興味深い。

音楽は、時代や国境を越えて、人が人である限り誰もがそれを享受する事ができる普遍的なものであり、少し極端に言えば、光を探し求め向かっていく様を描いているとも言えるかもしれない。今回のプログラムによる光が射す方への旅路は、きっと今の我々に大きく響くものがあるのではないだろうか。

J.シベリウス

フィンランディア 作品26

1865年にフィンランドの小都市ハメーンリンナに生まれたシベリウス(1865-1957)は、動乱の時代を生き抜いた。

彼が生まれる半世紀以上前に制定されたフレデリクスハン講和条約(1809年)によって、それまでの600年に渡ったスウェーデンによるフィンランド支配は、帝政ロシアにその権利が割譲された。当時のロシア皇帝アレクサンドル一世は、以前からの社会制度をそのまま受け継ぐことを承認し、自治権の保証も優遇するなどした為、フィンランドの人々にとっては目に見える大きな変化は現れなかった。しかし、1825年から在位した皇帝ニコライ一世の時代になると状況は少しずつ変化していき、中央ヨーロッパで主流となりつつあった自由主義思想の流行を恐れて、ロシア側が官僚支配の強化及び言論の取り締まりを行うようになっていった。

1898年の夏にフィンランド総督にロシアの熱烈な愛国主義者であるボブリコフが任命してからはロシアの支配はさらに厳しいものとなった。彼が就任してからわずか半年後に発布された「二月宣言」は、まさにロシア化政策の最たるものと言われており、そこにはフィンランドの自治権を廃止する事が明記され、軍隊、教育、言語、芸術など社会のあらゆる領域にロシアが介入し、検閲を強化する事でフィンランドの文化全体を根幹から崩壊させることを目論んだ恐ろしい内容が盛り込まれていた。

しかし、ロシア側の圧力が高まれば高まるほど、それと反比例してナショナリズムは各方面で高まりを見せた。その中でも、フィンランドのメイン新聞であった「バイヴァ・レヒティ」の発刊停止に抗議し、言論・出版の自由を訴えるべく急遽開催されたイベント「報道の自由」は、まさにその象徴と言えるだろう。3日間に渡って行われた様々な催しの中で最も注目を集めたのが舞台劇「歴史的情景」の上演だった。シベリウスはこの劇のために《報道の日のための音楽》作品25、26として7つの曲を書いている。

1・序曲

2・ヴァイナミヨイネンの歌(偉大なる詩人)

3・フィンランドにキリスト教が入る場への序曲

4・トゥルク城のジョン公爵の場への序曲

5・三十年戦争のフィンランドの場への序曲

6・大いなる対立の場への序曲

7・「フィンランドは目覚める」場への序曲

この作品の中で聴衆が最も熱狂したのが7曲目だった。同舞台劇の最後を力強く飾ったこの場面は、フィンランドの歴史上の人物（に扮した演者）が多くの役者と共に舞台上に登場し、フィンランドの苦難と輝かしい未来を壮大に描いたものである。そしてこの作品が後に《フィナーレ》、《祖国》、というタイトルを経て《フィンランディア》という独立した作品となり、現在では同国の第二の国歌として世界中の人々に演奏され続けている。

《フィンランディア》はフィンランドの歴史を飾る4人の偉人が登場する場面への序奏から始まる。その重々しい、何か大きな力に押しつぶされそうになりながらも抵抗する音楽は、まさに同時代のフィンランドの雰囲気表現しているかのようだ。

その後ティンパニの激しいトレモロに乗ってファンファーレが鳴り響く。決して明るく輝かしい性格ではなく、まるで絶対に権力に屈しないということを意思表示するかのごとく、厳しい表情をたたえている。

音楽が一瞬静まった後、低音楽器から5拍子の歩みが聞こえ（この5拍子をフィンランドを代表する叙情詩「カレヴァラ」の韻律から来ているとする説もある）、音楽は一転、明るく輝かしい雰囲気となる。これを「勝利」と捉えるか「戦い」と捉えるかは意見の分かれる所だと思うが、前半の鬱屈した様相から転じて、非常に前向きで誇り高い音楽となっている。そして、その後に非常に美しい「フィンランド讃歌」が、始めは木管楽器、次に弦楽器にて二度演奏され、厳しい表情だったファンファーレは高らかな祝砲へと変化し、大団円の中で曲が終わる。

今では、この作品はフィンランドの12月6日の独立記念日で必ず演奏される。生前、作品と思想（政治）の関わりについてはメッセージを残さなかったシベリウスだが、彼の音楽は言葉で語る以上に、フィンランドの、そして世界中の人々の心に強く訴えかけた。

R.グリエール

ホルン協奏曲 変ロ長調 作品91

1918年にモスクワに生まれたホルン奏者ヴァレリー・ポ

レフはモスクワ音楽院を卒業後、20歳にしてボリショイ劇場の首席ホルン奏者として活躍していた。《白鳥の湖》の初演であまりにも有名な同劇場は、オペラの公演以上にバレエの公演に力を注いでおり、同時代の作曲家に多くの作品を委嘱してきた。その中のひとつにバレエ《青銅の騎士》はあり、その作曲者こそがグリエールだった。

《青銅の騎士》のリハーサルに立ち会った作曲者に対し、ポレフは「控えめで、洗練されており、表情豊かな茶色の瞳は優しく親しみやすい人だった」と後年に述べている。

多くのリハーサルでは、客席で聞いている作曲者が舞台上に颯爽と走り込んで指揮者やオーケストラにリクエストすることが日常だった（そしてそれによってうまくいかないことがよくあったらしい）。しかし、グリエールはリハーサル中は何も言わずに静かに座っていて、休憩時間にだけ指揮者と話し合うというスタンスをとっていた。その話し合いに参加したポレフは、控えめながら理解が深く、そして豊富な知識を持ち合わせながらも、奏者の意見を尊重しそれを考慮してくれる素晴らしい人格者グリエールに対し、何か惹かれるものを感じたようだった。彼は早速ホルンのための協奏曲を書いて欲しいと作曲者に打診し、「時間がある時に書く」と約束の返事をもらった。

それから約一年後に作曲者からの協奏曲の完成を知らせる電話が鳴り、初演までは約半年という短い時間であった。ディスカッションを重ねながら修正を加え、そしてポレフ自作のカデンツァを挟んだ初演は、1951年5月10日に作曲者自身の指揮によるレニングラード放送交響楽団の演奏会で、成功裏に幕を閉じた。翌年には同コンビによって録音され、それは現在でも聴くことができる。「カンタービレホルン」を目指し、モスクワ音楽院で声楽を習い、ベルカント唱法をマスターしたポレフの甘く芳醇な音色を聞くと、グリエールがいかに彼のホルンの音色を意識して曲を書いたかという事が良くわかる（実際に彼は曲を書き始める前にポレフを自宅に招き、様々な曲を演奏してもらったり、使用音域について入念な打ち合わせをしていた）。

作曲家グリエール（1875-1956）はキエフに生まれ、キエフ音楽学校とモスクワ音楽院でヴァイオリンと作曲を学んだ。

40歳の時に指揮を学びにベルリンに留学した以外は、基本的に国内を拠点に活動し、ソヴィエトの音楽文化の発展と構築に貢献した。また教師としても名高く、教鞭をとったモスクワ音楽院などでプロコフィエフやハチャトゥリアンなどを育てている。

ホルン協奏曲はグリエールの生涯の中でも最晩年にあたる1950年に完成した作品だ。1950年といえば武満徹が《2つのレント》で作曲家デビューを果たし、シェーンベルクが没する前年である。そんな前衛音楽が隆盛を極めている時代の中で、はっきりとした調性音楽かつ従来の形式に忠実に書かれたロマンティックなこの協奏曲は、かえって人々には新鮮に響いのではないだろうか。

第1楽章は短い序奏付きのソナタ形式。変ロ長調のマーチ風の序奏に続いてホルンが短いアインガングを奏で、第一主題部が始まる。その後音楽が少しずつ落ち着き、へ長調にて第二主題部が始まる。Tranquilloと記されたこの部分は弦楽器とソロによる室内楽的な雰囲気書かれ、第一主題部とのコントラストが際立つ。

展開部では両主題が巧みに絡み合い、そして目眩く転調を繰り返しながら音楽が発展していく。そして再現部の直前にホルンのカデンツァが挟まれ再現部でマーチが再び登場し、終結部では勇壮な雰囲気の中堂々と終わる。

第2楽章は3部形式のロマンス。バレエ音楽やオペラ、交響詩を数多く書いたグリエールらしいドラマティックな音楽。第1部は木管楽器の前奏に続いて弦楽器の波打つシンクペーションに率いられホルンソロが情感あふれるソロを奏でる。Poco agitatoと書かれた第2部では様子が大きく変わり弦楽器のトレモロと、どこか落ち着かないメロディが焦燥感と不安を掻き立てる。音楽が切迫していく中、ホルンの短いカデンツァ（楽譜上にはAd lib.（自由に）の指定）が挟まれ、再び最初のテーマが第3部で高らかに演奏され、木管楽器による後奏によって静かに幕が下りる。まるで男女の恋物語が昔話風に語られているような、大変ロマンティックな音楽だ。

第3楽章ではロシア民謡風の旋律が木管楽器と金管楽器によって奏でられた後、速い2拍子によるトロイカの音楽が始

まる。ロンド形式で書かれており、チャイコフスキーの協奏曲と同じくどの楽章よりも全体としてとてもロシアの民族色が前面に表出されている。終盤では最初に奏でられた民謡風の旋律が総奏で演奏された後、駆け抜けるようなホルンのパッセージに率いられながら快活に音楽が進み、華やかに曲を閉じる。

J.シベリウス 交響曲第2番ニ長調 作品43

シベリウスは生涯に何度も海外旅行に出かけた。ある時は作曲を学びに、ある時は自分自身を売り込みに、そしてある時は作曲に煮詰まった時に新たな発見を求めて。しかし、1900年のイタリアへの旅行はそれまでとは目的が異なっていた。シベリウス家には6人の娘が生まれたが、三女のキルスティがその旅行の直前に、当時流行していたチフスにかかり、わずか2歳にして亡くなったのだった。

子供のあまりに早い死別に家族は深い悲しみにくれ、一家は想像以上の苦しみに襲われた。その様子を目の当たりにしたシベリウスのパトロン、カルペラン男爵は彼にイタリアへ訪れることを提案し、援助者からそのための資金を集めたのであった。家族とのこれほど長い期間の海外旅行は最初で最後となったシベリウスであったが、旅行先でもすぐにすっきりと心の闇が晴れた訳ではなかった。むしろ旅行中二女ルースが病に倒れたり、そこでも様々な困難が待ち受けていた。そんなある時、何が理由かは分からないが、シベリウスは突如手紙を一筆書き残し家族を置いて一人ローマへ旅立つ。

約二週間にも及んだその体験は、結果としてシベリウスに強烈なインスピレーションを与えた。古の美しい建築物を見たり、教会でバレストリーナの対位法に触れたり、またヴェルディの《リゴレット》を観劇したシベリウスは、家族と合流後フィンランドへ帰国し、早速フィレンツェ出身のダンテの叙情詩《神曲》に基づく管弦楽曲を構想する。そのスケッチには「キリスト」というメモが添えられていたようだが、それはあたかも神曲の基調にある愛の力、神の恩恵によって魂は救済されるという宗教的思想によって、この一家を襲った深い悲しみを宗教的な力を借りて何とか乗り越えようとするシベ

リウスの前向きな決意が表れているようだった。結局その作品が完成されることはなかったが、その内の幾つかのテーマを使って全く異なる形で傑作が誕生した。それこそが交響曲第2番である。

■ 第1楽章

まるで波を想起させる印象的な弦楽器群の上行音形のもティーフによって始まる冒頭は、家族とイタリアで過ごした港町ラッコでの海景色の印象から来ているとも言われる。二長調という明るい調性が選択され、瑞々しい雰囲気の中音楽が進んでいく。展開部に入ってから表情は徐々に変化し、ヴィオラの微かな刻みの上で木管楽器が不安げな表情のテーマ、或いはその断片を散りばめ、暗い影の音楽を展開する。しかしその後、光が差し込み始め、金管楽器による挿入句の後、再現部では二長調の音楽が戻ってくる。曲の最後には波の音形が再び表れ、静かに曲を閉じる。この楽章が、その後訪れる悲しみを前にしたかけがえのない幸せな頃の回想のように感じるのは、行き過ぎた考えだろうか。

■ 第2楽章

冒頭のティンパニの一打によって雰囲気が一気に変わる。コントラバスとチェロが爪弾く苦しい弦は、多くを語らずも重苦しい想いを胸にひめている。そしてファゴットによる独白は、まるで胸に何かがつつかえた様に苦しいうめきにも聞こえる。やがて、少しずつ楽器が増え、音楽が動き始めるとようやく感情が溢れ動き出し、明確な表情が見え始める。そしてそれらが頂点に達するところで突如として音楽の流れが断ち切れ、金管楽器のコラールが鳴り響くが、これは「怒りの日」のテーマをなぞっており、あたかも張り叫んでいるかの如く、聴衆へ悲痛な想いを強く訴えかけてくる。

音楽が再び休止した後、嬰へ長調という別世界への転調を経て弦楽器によって奏でられる美しい音楽には、シベリウスが「キリスト」と記してあったという記録もある（自筆譜はほぼ焼失）。また、この調性に用いられる6つのシャープ#は、楽譜に記すと十字架を示しているという説や、あるいは、このテーマの音形自体が線で結ぶと横たわった十字架が現れるなどの様々な考察があるが、それらの考えが「確かに」と感じてしまうほどの、極めて宗教的な瞬間が訪れる。それは前半

の苦しく悲痛な音楽から一転して、天上から光が差ししてくる様な救済の音楽のようでもある。その後、徐々に音楽が動き始め、理不尽に怒りをぶつける低音セクションとの激しいぶつかり合いが展開される。後半でもこれらの対立関係は平行線上に現れるが、結局最後まで解決はされない。そして最後のピツィカートは何かと決別するかの様に、音楽は無慈悲に断ち切られて終わる。

■ 第3楽章

スケルツォとトリオで書かれているが、このスケルツォの疾走感にはとにかく一切の迷いがなく、ひたすらに突き進んでいく。しかし、その後現れるトリオはとても静かで美しく自然の安らぎに満ちている。始めにオーボエによって奏でられる旋律はフィンランド人が小さい時から慣れ親しんでいる鳥のさえずりを表しているという説があり、つまりそれは生の喜びを表しており、人の命を見ることが出来る。一瞬その「何か」に手が届きそうな瞬間が訪れたと思った途端、再び音楽は疾風怒濤のスケルツォに強制的に戻される。そして荒れ狂う景色の中から再びトリオの主題が表れ、ついにそれが眼前に広がってきた所で、4楽章へそのまま音楽は繋がっていく。

■ 第4楽章

再び二長調に回帰する。祝祭的な金管楽器に導かれ全体的に喜びに満ち満ちた音楽だが、2箇所大きく音楽が影を落とす箇所がある。鬱々としたヴィオラとチェロによって繰り返される音形の上で、木管楽器が重く暗い陰鬱なメロディを奏でる。それはまるで葬送行進曲のようであり、そこには直前に亡くなった三女の存在を感じずにはいられない。しかし、その後には再び嬰へ長調の音楽が現れ、魂の救済の様相を呈する。音楽はその後も様々な場面を潜り抜けながら進み、いよいよ最後の頂点に向けての力強い歩みを始める。一切の迷いも躊躇もなく、そこにはただ、未来への希望を信じていく様子が描かれており、様々な想いを越えて次の時代へ進もうとするシベリウスの強い意志を感じずにはいられない。正に光が射す方への前進が始まったかの如く。